

その代表例が「寛永度江戸城天守」ですが、姫路城天守から約30年でここまで架構が整理されています。しかし姫路城天守から約100年後に、姫路城天守よりやや小さい「宝永度小田原城天守」が長大な通し柱を活用しながら建造されました。この意義は、天守の構造の変遷を捉える上でも非常に重要だと考えています。

### ○まとめと課題

#### ■小田原城天守のここがスゴイ！

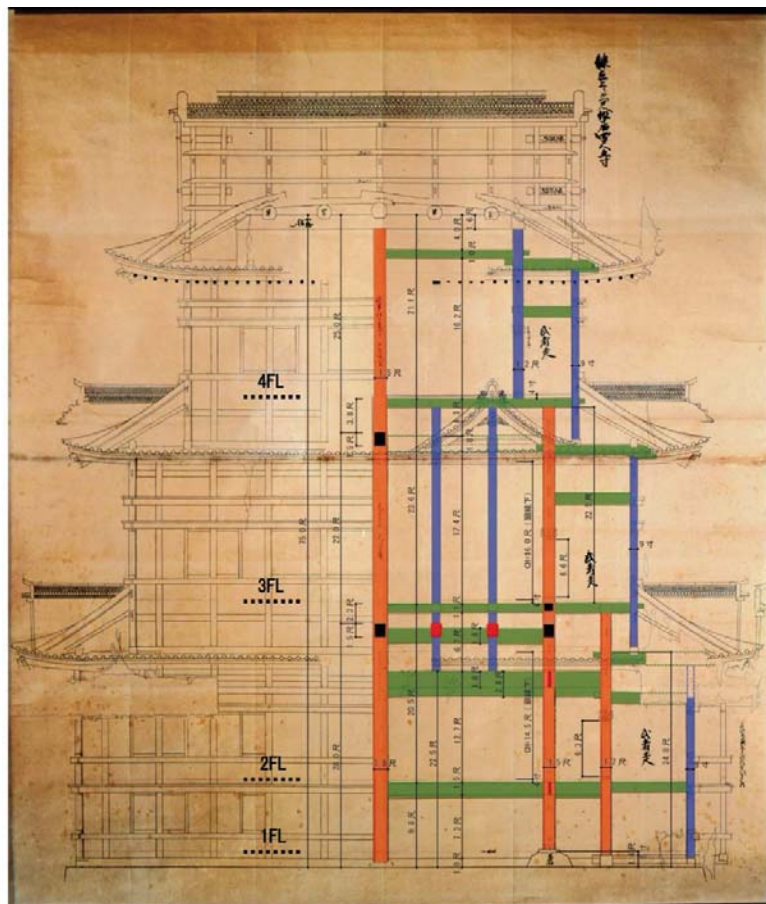
- ・実は5重天守の大きさ！  
→外観3重だけど…
- ・23mもある心柱！  
→1本ものかも…
- ・荷重分散のための柱がある！  
→「入側管柱」
- ・用意周到な木組み！  
→2階平面はどんな感じか…

#### ■「扱き梁」の事例収集

#### ■平面計画の考察

#### ■史資料の再調査

…etc



「東博模型」土台修理の痕跡など

著者がこのような考察に辿り着いたきっかけは、引図の存在に他なりません。繰り返しになりますが、西博士を中心とした調査団の報告書では、主に3基の模型の比較検討と最上階の「摩利支天空間」の新知見が主題でしたので、引図については詳細な調査研究はなされていません。近日中に再度引図の調査が許可される予定ですが、より詳細にそこに描かれた情報を読み解きながら、改めて3基の模型との比較研究が必要だと考えています。また東博模型についても、既に知られていることですが、土台などに修理の痕跡が見られることから今後詳細な再調査が必須です。今回で第一部は終了しますが、調査研究を進めていく上で新たな情報や知見が得られればまたみなさんにご紹介していきたいと思えます。

※個々の写真・図版のSNS等への転載はご遠慮ください

### 特定非営利活動法人「みんなでお城をつくる会」

〒250-0042 神奈川県小田原市荻窪 4385 <http://www.odawara-oshiro.org>  
Tel:0465-46-8944 Fax:050-3488-2039 Mail:info@odawara-oshiro.org



正会員・賛助会員（法人・個人）を募集しております。お申し込みは上記QRコードからお願いいたします。



## 小田原市の第6次総合計画を機に

2021年9月20日

第6次小田原市総合計画(案)の中に「天守木造」が明示されましたが、決して木造復原が決定されたわけではなく、今後様々なプロセスが必要であるわけですが、まずは、現時点での総合計画案が今年度内に正式に議会承認へ進むためには、以下のような市民意見反映の機会があります。本会としても、その動向を注視して、適宜アクションをとっていきます。

#### ●パブリックコメント(9/13締め切り)

本会から多くの会員からパブリックコメントが提出されるように既に呼びかけ、相当数の提出ができました。

#### ●市民等との対話の場(8月～10月)

審議会など既存の会議体の他、自治会総連合のブロック毎に意見を求める場などが設けられます。

#### ●総合計画審議会(8月下旬～12月)

学識経験者、各種団体の構成員、公募市民からなる総合計画審議会が設置され、12月までに10回程度の会議が開催されます。

### 《第6次小田原市総合計画策定の流れ》



第6次小田原市総合計画行政案【概要版】より

第6次総合計画の中に正式に木造の検討が盛り込まれたならば、市の内部に天守木造復原も含んだ小田原城整備活用のための公式な組織を立ち上げて、計画の具体化が進んでいく体制を設けるよう、本会として市側と協議の場を重ねていることを報告添えます。

# 小田原城天守事始め ～木造天守への道～ 第 19/20 回コラム発信

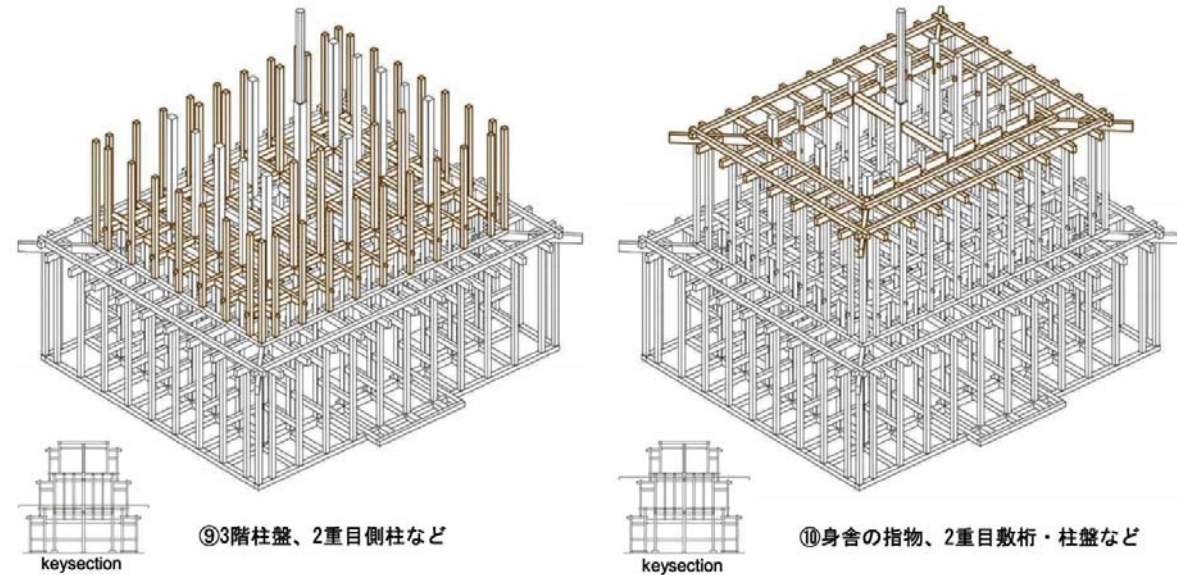
小田原城天守調査研究室 宮本 啓

## 第 19 回 「東博模型」と「引図」からみた軸部の組み立て方について③

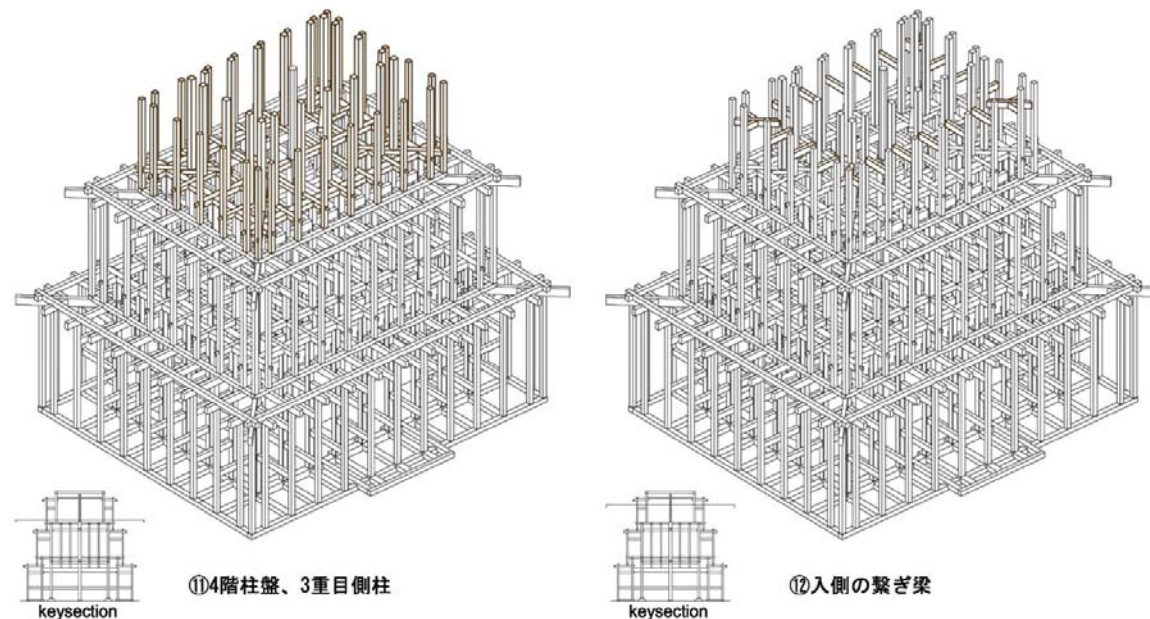
今回も引き続き軸部の組み立て方についてご紹介しますが、本天守は層塔型ですので基本的に 3 階から上は同じ軸組の繰り返しになります。ご存知のように、西和夫博士の研究により最上階に「摩利支天空間」が発見されましたが、今回その部分については割愛します。

### 3 階から 4 階

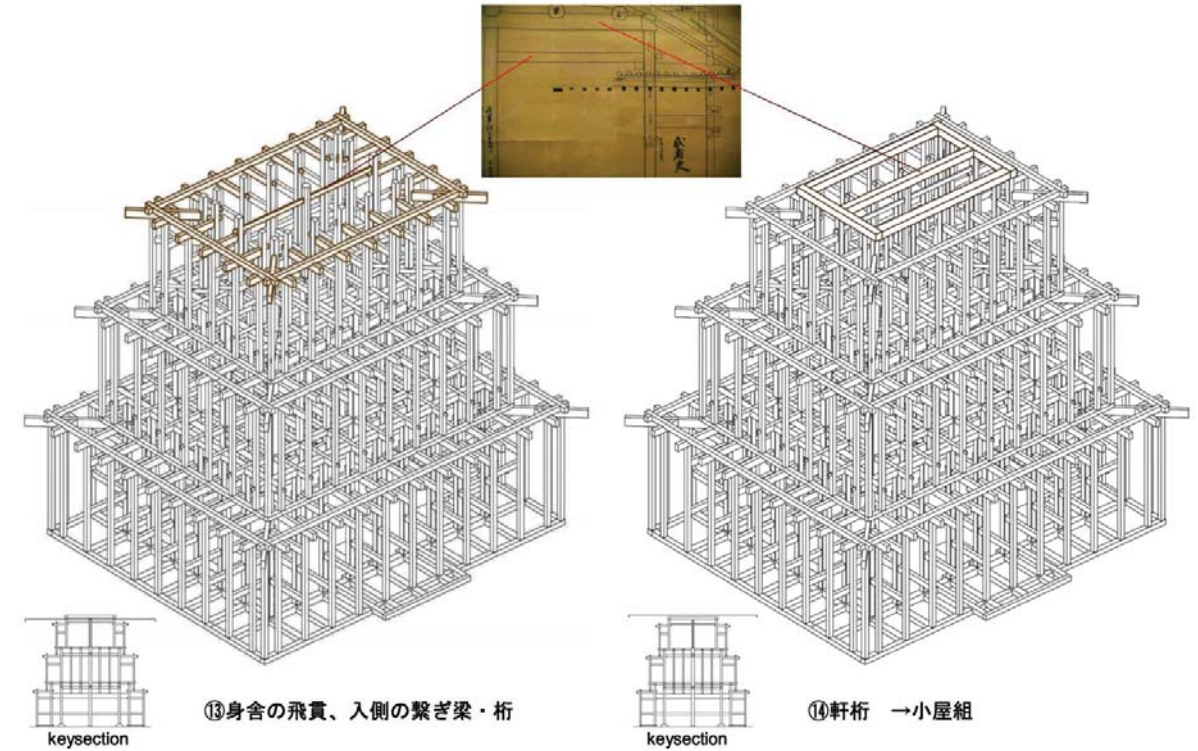
3 階の身舎外周部には 1 間ごとに管柱が建ちますので、⑨柱盤や 2 重目の側柱などを納めていきます。全体に渡って側柱は、足元と柱頭部など 3 カ所で身舎柱或いは入側管柱に繋がっています。⑩心柱と身舎柱を繋ぐ指物や敷桁などを納めて 2 重目までが建ち上がります。



次に⑪4 階の柱盤や身舎の管柱、側柱などを納め、⑫入側と繋いでいきます。4 階には「摩利支天空間」を構成する柱が身舎の内部に建ちますが、軸部構造を検討すると、あくまで見え掛かりとしての柱に過ぎず構造的な意味合いは薄いことが考察できます。



続いて⑬最上階である 4 階の繋ぎ梁などを納めていきます。図⑬の赤線で表記した部材は「飛貫」としていましたが、実際は側柱を貫通してホゾがでていますので本来「貫」とは言えません。修論執筆時の著者のミスですが、もしかしたら幅を扱った指物にあたるのかもしれませんが。最後に⑭軒桁を納めて軸組は完了します。身舎外周部と心柱で荷重を受けていますので、先述したように、身舎内部に柱が建っても大きな荷重はかからないことがわかります。



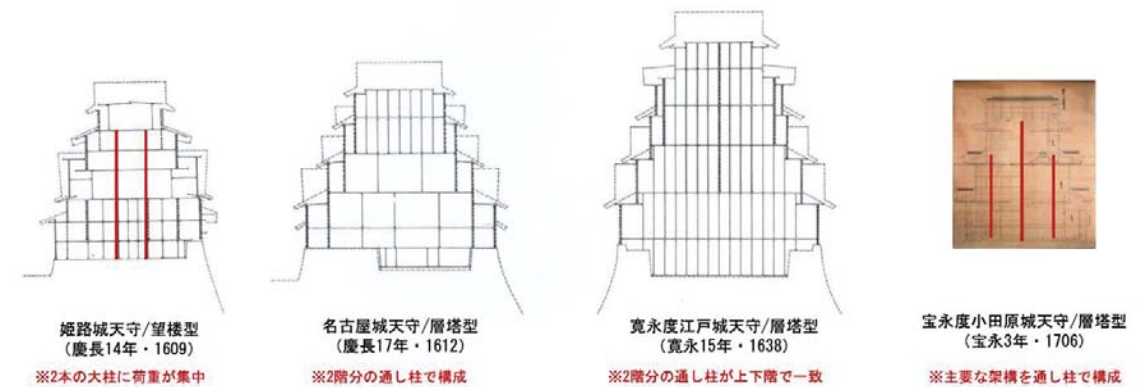
手順としてはこの後小屋組を造っていきますが、実際は初重、2 重目の小屋組は軸組の進捗に合わせて同時進行だったかもしれません。さて、皆さんも想像を巡らせてもう一度初めからアタマの中で組み立ててみてください。加えて、一体どれくらいの数の職人さんがここまでの過程に関わったのでしょうか…。

## 第 20 回 架構からみた小田原城天守

前回まで数回に渡り、天守の組み立て方の考察をご紹介しました。今回はこれまでの総括と、今後の調査研究の課題が何なのかを見ていきたいと思います。

### 天守の発展過程における「宝永度小田原城天守」

第 3 回で少しご紹介しましたが、例えば通し柱に注目した場合、学術的には天守が望楼型から層塔型へ発展していく過程で、姫路城天守のような長大な通し柱は次第に使用されなくなり、2 階分の通し柱が整然と配置される形式へと変遷していったとされています。



図版出典：引図以外は、内藤 昌『復原日本大観 1 城と館』より編集・転載